

理窓会 千葉支部 教職員部会 会報

第56号

「予測困難な時代だからこそ、

我々にできることとは」

理窓会千葉支部 教職員部会会長

千葉県立茂原高等学校長

中村 孝幸



私が教諭として学校現場にいた頃は、理科大卒の教員が在籍している学校には理窓会教職員部会会報が送られていました。その会報

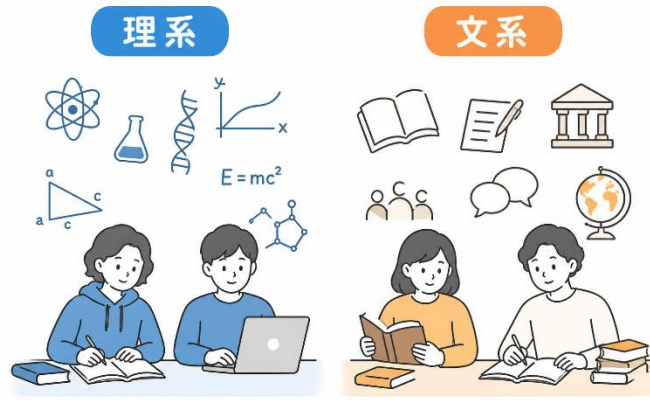
を通して、この人も理科大卒なんだと親近感を抱いた覚えがあります。今はどうでしょう。同窓であるという意識を持つている方は少なくなっているのではないのでしょうか。幸いにして自分が教諭の頃は、在籍していた学校には多くの理科大卒の先生方がいらつしやいました。そうした方々と当時を振り返りながら、よく雑談をしたものでした。今はこうした話ができる関係性や振り返ることができる時間が少なくなつたような気がします。

考えてみると、私が採用されたときは科目の採用者数は数名でした。教員の新規採用がほとんどない時期が長かったため、現在は教員の年齢構成も四十、五十代の方が極端に少なく、逆に今では若い方が多く採用されて二十代の先生がどの学校にも多くいる状況になっています。こうした年齢構成のアンバランスのひずみが影響しているのかもしれない。

さて、今の時代は「予測困難な時代」と呼ばれて久しいですが、学校教育を取り巻く状況も複雑化し、様々な変革が起こっています。今年の2月には文部科学省の高校教育改革に関する基本方針（グランデザイン）が公表されました。2040年に向けて目指す教育や人材育成のビジョンが示され、極めて重要な指針となっております。正解のない時代であるがゆえに高校の在り方を一律に決めてしまうことで、高校教育の多様性が失われてしまうのではないかという懸念は常にあります。しかし、国が示し

た3千億円という予算規模から、より良い高校教育の構築に向けて国が本気で取り組もうとしていることが推察できます。今回示されたグランドデザインの中で示された方向性のうち、かなり興味深い言及がありました。普通科高校における文系・理系の区分を将来的に解消し、2040年には生徒の進路選択の割合を文理で同程度にする方針が示されており、そこだけ聞けば、単なる制度設計の話のように思えるかもしれませんが、文理の区分は時間割、教員配置、進路指導、さらには学校文化にまで深く関わる仕組みです。最終的にその垣根をなくすことまで想定するというのはよほどのことだと思います。

もともと我が国の文理区分は、明治期以降の日本が近代国家として成長していくための合理的分業として生まれたと言われています。国家の利益に直結する自然科学（物理学・化学・医学など）に卓越した理系人材と、行政・文化統治に



必要な人文科学（法学・政治学・文学など）に深い知見を有する文系人材を、効率よく養成する必要があったからです。その合理的分業の概念は今も生きており、高校教育を効率的に運営しながら、生徒を多様な進路へ送り出すための制度として機能してきました。大学進学だけでなく就職も含め、限られた授業時間の中で必要な準備を整えるためには、ある程度の履修のまとめが必要だったからです。

さらに学校運営の側面から見れば、文理区分は時間割編成を可能にし、教員配置を合理化し、進路指導を整理する役割も担っていました。

なぜその仕組みを見直そうとしているのか。背景にあるのは、社会の変化だと思います。現代社会の課題は、単一の専門領域だけで決していく複雑さを持っています。多くの分野で複数の知識領域を横断する必要があります。同時に、進路の早期固定が本当に生徒にとっていいことなのかという問いも強まってきました。高校段階で文系・理系を明確に分けることで、学びの可能性を狭めるのではないかという問題意識は多くの方がお持ちではないでしょうか。こうした変化を踏まえ、今回のグラウンドデザインからは、「分ける」ことより「横断的に学ぶ」ことを重視する方向へ視点が移りつつあることが読み取れます。我々教職員には、常に「全ての生徒に共通して必要な学びとは何か、進路の専門性はいつ、どのように形成すべきか、学校は

どこまで進路準備を担い、どこから先を生徒の選択に委ねるのか」、こうした正解なき問いが投げかけられています。

終わりに、学校現場にいる我々教職員は次代を担う生徒の育成に尽力するとともに、理窓会千葉支部のさらなる発展に向け、千葉支部役員の皆様をはじめ、事務局の方々と協力しながら取り組んでまいりたいと思います。引き続きどうぞよろしく願いいたします。

**令和七年度
理窓会千葉支部
総会報告**

令和七年八月九日（土）、ポートプラザちばを会場に令和七年度理窓会千葉支部総会が開催されました。例年八月の後半に開催していましたが、今年度はお盆前の開催となりました。

支部の総会に先立ち、教職員部会の総会が行われました。部会長

が県立千葉中学校・高校・高梨祐介校長から県立茂原高校・中村孝幸校長に引き継がれました。



鈴木隆文 支部長

その後、支部総会が行われました。大学からは来賓として石川正俊学長、安盛敦雄常務理事、松原秀成理窓会副会長、酒井陽太維持会会長をお迎えし、総勢四七名が出席しました。また近県支部として東京支部、神奈川支部、埼玉支部から、さらにこうよう会からも来賓を迎えました。

支部総会では令和六年度の活動報告と決算報告、および令和七年度の活動計画と予算が承認されました。

総会のあとは安盛敦雄常務理

記念撮影を終えて懇親会が行われました。水野澄顧問による乾杯の御発声のあと、参加者が次々に登壇しスピーチを行いました。特に学生や新社会人の方々の登壇には先輩参加者からの期待が膨らんでいたように思います。祥子さんのミニライブも行われ、会場は盛り上がり、会員相互の交流も大いに深まりました。

講演会は東京理科大学学長である石川正俊先生をお迎えし、「AI時代の科学技術の構造と社会受容性」という演題で御講演いただきました。



松原秀成 理窓会副会長

事、松原秀成理窓会副会長、酒井陽太維持会会長の三名から大学についての報告がありました。



祥子さん ミニライブ



懇親会の様子



参加者の集合写真

石川正俊先生は、東京大学工学部計数工学科を卒業し、同大学院工学系研究科を修了、工学博士を取得しました。通商産業省工業技術院の연구원を経て、東京大学工学部助教授、同大学院教授として教育・研究に従事し、副学長や理事も歴任しました。専門は情報理工学で、高速ビジョンやロボットシステムなどの研究において先駆的



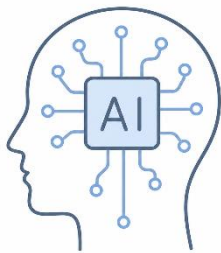
石川正俊 学長

講演会
「AI時代の科学技術の構造と社会受容性」
東京理科大学学長
石川正俊 先生

な成果を挙げています。2022年より本学学長に就任し、AI時代に対応した教育改革や学際研究の推進に取り組んでいます。

講演では、人工知能(AI)時代における科学技術と教育のあり方について取り上げ、「問題解決型」から「価値創造型」への転換の必要性を強調しました。科学は既存の課題を解くだけでなく、「まだ存在しない価値を生み出す営み」であり、検索エンジンやSNSのように、新たな価値を提示することで社会に受け入れられてきた事例がその重要性を示しています。

現代の科学技術は単一分野ではなく、異分野の融合や統合によっ



て発展しています。実際にノーベル賞研究でも、物理・生物・情報科学の融合や、AIを化学に応用した研究が成果を生んでおり、今後は分野横断的な視点が不可欠になります。こうした中で、競争力や展開力、独創性を備えた人材育成が教育の大きな課題であるとしています。

教育面では、「理解する力」に加え、「理解した知識を使って新しい価値を生み出す力」を育てる必要があると強調されました。さらに、生成AIの普及により知識そのものの価値は相対的に低下し、知識はAIに任せる一方で、それを活用して価値へと転換する力が重要になると指摘しました。そのため、教員の役割はむしろ高度化し、思考を促し創造性を引き出す指導力が一層求められるとしています。

また、新しい価値創出には試行錯誤が不可欠であり、「正しい失敗」や挑戦を評価する教育の重要性にも言及しました。従来のように一つの分野を深く掘り下げるだけで

なく、異分野を結びつける融合型、あるいは目的に応じて分野を統合する思考が必要です。

一方、日本では独創的な取り組みの評価が難しく、リスクを避ける傾向がイノベーションの阻害要因となっていると分析しました。

今後は教育段階から「問題を解く力」だけでなく「問題を発見し創造する力」を育成し、社会の変化に応じて新たな価値を生み出せる人材を育てることが不可欠であると結論づけています。

演全体を通して感じたことですが、石川先生は幅広い分野との関わりを持っており、その中で時代の流れをしっかりと捉えていると思いました。学校現場で教科教育に向き合っていると、どうしても視野が狭くなりがちです。教員もこうした新たな視点を大事にすること、知をどう活用するかということを念頭に教育活動に励まねばなりません。貴重なお話をありがとうございました。

フレッシュマン紹介

県立関宿高等学校教諭

田上 康生 先生



こんにちは、私は採用二年目（R7年度）の高等学校で数学の教員をしている田上と申します。

現在は2学年で初めてのの担任をしています。私の勤務校は様々な事情を抱えた生徒が多く、何をやるにしても初めてのことが多くて、毎日苦労の中に多くの学びと経験を得られていることを実感しながら仕事に励んでいます。

今年度私が頑張っていることは、学級経営です。はじめを許さないことはもちろんですが、特に力を入れているのは社会人として必要なものとはどのようなかを考えさせることです。私のクラスのは多くは就職希望の生徒です。しかしながら、社会人になるにあたり言葉遣いや、礼儀、挨拶など基本的で当たり前のことが身についていない生徒が多いのです。

そこで、進路学習も含め基本的なことを定着させるとともに、将来自分がどんな人間になりたいのかを生徒たちに常に問いかけるようにしています。また、現在の自分と向き合わせるために月に一度は生徒と個人で話をし、現状とこれ



からの目標を一緒に考え、来年度の卒業に向けて少しでも成長の支援ができるように私も生徒と共に日々努力しています。

今年度苦労していることは、教育相談関連の業務です。今年は、様々な関係機関と連携を取りながら生徒の支援をしているのですが、初めての経験が多く、自分自身がこれまでの人生で関わりがなかったことに触れているので、忙しい業務の中ではありますが、毎日先輩教員の方から学び、自分でも勉強をしています。ただ、苦労とは言いつつ自分のこれからの教員人生で役立つものであると感じる部分が多いのでとてもやりがいをもつて仕事に取り組んでいます。

最後にこの仕事は大変なことも多いですが、周りにいる先輩教員に支えられながら楽しく仕事ができている。これからも、自己研鑽を怠らず生徒のために自分に何ができるか常に考えながら精進していきたいと思っています。

(プロフィール)

創域理工学部数理科学科卒（2024年3月）

趣味は鉄道、車で旅すること、運動すること。特技は野球などの球技。

令和7年度より教職員部会開会係を担当。

事務局より

教職員部会では県内の教職に携わる会員のネットワークづくりをしてきました。かつては紙の会報と総会の案内ハガキを郵送してきましたが、ペーパーレス化や個人情報の観点からホームページによる会報の公開と総会の案内に変わりました。近くの職場にいても同窓生と分らないこともあり、できるだけ参加する会員を増やしていきたいと思えます。そこで千葉支部では、以下のようなメール登録をしております。ぜひ県内会員にお声がけいただいで、登録をお願いします。



メール登録

▼QRコードをスマートフォンで読みとり、メールを送信してください。返信メールが届きましたら、リンクを開いていくつかの質問に回答してください。内容は氏名や所属、卒年・学科等です。メールが届かない場合は迷惑メールに仕分けられたり、ブロックされたりしている可能性があります。

▼QRコードが読みとれない場合は、次のアドレスにメールを送信してください。

risouchiba@mamail.jp

件名は空欄、本文は「入会」のみにしてください。

▼こちらのメール配信サービス（マメール）は、登録者に一斉に配信する機能を有しています。いわゆるメールリングリストのように相互に送り合うものではありません。維持・管理のために、月に一回程度テストメールが配信されます。

御案内

・令和八年度千葉支部総会

令和八年八月二二日（土）午後
ポートプラザちばにて

マメールにて御案内がありましたら、お申込みください。また、お知り合いの会員の方も誘いたいだき、会員のネットワークを広げていきたいと思えます。

・教職員部会研修会

総会と同日、同会場にて午前十時より開催します。千葉支部教職員部会では、若手教職員の活躍を支援するため、研修会を開催します。気軽に御参加ください。千葉支部HPのフォームからお申込みください。

編集後記

千葉県公立学校の教員として採用されて今年で25年目となりました。初任のときにお声がけいただき理窓会千葉支部の総会に出席しました。本誌の中村部会長の記事にもありますとおり、初任の頃は採用数がとても少ない時代でした。高校の理科で採用された理科大卒は自分一人でしたので、お歴々の先輩方を前にとっても緊張したことを覚えていきます。

5年後、事務局に声を掛けられ（とは言うもの他に人がいないので・・・）会報係を仰せつかりました。原稿の依頼や印刷業者とのやりとり、お礼状の送付など丁寧な仕事を先輩事務局員に教えていただきながら会報を作成にあたりました。また会合係の仕事も兼務し、会議や宴会の仕切りについても学びました。

採用から15年後には事務局長を仰せつかり、今年で10年目となります。今回の会報を編集して

いて、フレッシュマン紹介というコーナーを久しぶりに掲載できたことに、新たな時代を感じました。というのも以前は勤務校紹介とともに毎号に掲載されていたものです。しかしながら、採用数が少ない時代はこのようなコーナーが成立せず、また現職の会員数も減少していることから、しばらくフレッシュマン紹介のコーナーは掲載がありませんでした。

ここ数年は若手の先生方が総会に複数名が出席して下さるため、理窓会千葉支部教職員部会も世代交代の流れが到来するのではと期待しています。同窓会組織の事務的な仕事、例えば会合の仕切り、名簿の更新、会計などは面倒といえば面倒です。でもその面倒なことを同窓生の仲間と一緒に取り組んでこそ、そこにコミュニケーションが生まれ、コミュニティができるものと思います。田上先生の就任をきっかけに若手の方が新たな事務局員として活躍してくれることをお待ちしております。（飯島）